

はじめに

文字化、映像化では描ききれない技能と物心が日々の暮らしの中にある。これらは生活の事細かな現場で、繰り返し経験し、身体で覚えることどもであり、総体として伝統的知識体系、あるいは伝統的知恵と呼ぶものである。研究者たちも、ましてや市井の人々は文字情報で、最近ではデジタル情報で残せば、必要に応じて再現できているかのようだ。確かに大まかにはできるだろうが、微妙な細部に至ると、かなり難しく、実際には再現できないことが多いのではなかろうか。つまり、現場で、繰り返しの直接体験で身につけないと、習得できず、継承できない技能と物心があると思うのだ。

過疎高齢化に重ねて、人口減少、地域社会の崩壊への危機意識が世上で姦しいが、大方は現代文明の根底にまで下りた課題探究、原理的な思索に至らず、場当たりの皮相の解決策を、焼け石に水のごとく、打っているにすぎない。しかし、他方で、少ないとはいえ、優れた先人たちが現場で実践し、蓄積してきた成果は見向きもされない。過疎高齢化の問題は地域経済の崩壊だけではなく、根源的には高齢者から学ぶべき現場での経験の蓄積、伝統的知識体系の再創造と継承が途切れそうな、歴史的な危機的タイミングにあることだ。日本で暮らしてきたという基層文化が統合性を失い、歴史的に崩れる変曲点にあることだ。

各地域における日々の暮らし文化の根にある伝統的知識のありようから思えば、オリンピックや原子力発電所にまつわる補助金行政に依存しない、堅実な経世済民の方策があるはずだ。率直に言えば、今からでもオリンピックなど断り、競技場よりも福島原子力発電所の廃炉処理と高放射線量地域からの住民移転を急ぐことに、予算を重点的に使用するべきだ。オリンピックをしたい国はいくらでもあるから、優先順位からして、サッカーのように賄賂を私物化するよりも罪は軽く、正直に事情を説明して謝罪すれば済む。生命に致命的な環境汚染を防ぐために、放射性物質を太平洋に流し続けてはいけない。重ねて、放射性物質汚染地に住民を帰還させるなど、行政府も東京電力も責任逃れは言わないで、震災被災地の住民が暮らしを立て直せるように、地域社会を支援することが最優先だ。海外からの不確実な侵略の危機を煽るよりも、国内にある現実の危機に目を塞がないで、しっかりと見据えて、対策対応すべきである。聡明な政治家は明治維新政府以来の「勝てば官軍」という偽善の政策手法を断ち切って、誠実に市民社会の問題解決のための政策立案し、実行すべきだ。市民は他人事とせず、税金以外の任意の寄附や労力、市民社会の社会的共通資本を豊かにすることに、自分事として、自らの意思によりできること、したいことで地域社会に参加すべきだ。信頼を確認し合うことこそ、地域社会の強い回復力だ。

都市と田舎の比較

田舎 country (nation, land) と都会 city の比較を R. ウィリアムス (1973) がしていたので、彼の著作の文脈から表 1 を整理し、田舎と都会を対比してみた。

まず、「良い感情」として掲げられたキーワードは、田舎 (農村社会) は平和、無垢、淳朴な自然的生活様式の間であり、都会 (工業社会) は学問、コミュニケーション、光明のある人間の創りあげた中心地である。これに対して、「敵意を含む連想」として掲げられたキーワードは、田舎は後進性、無知、偏狭で、都会は騒音、世俗、野心である。

これらのキーワードを踏まえて、田舎と都会の良い点、悪い点が表 1 に「伝統的対比」として示されている。しかし、田舎と都会の現実的様態は歴史的にも多様で、現代的にも中間的な状況 gradation が一般的で、一面的な見方は不合理である。参考までに、ウィリアムスの考えの重要なキーワードを 2・3 掲げておく。イギリスの歴史的経験は日本にとっても大いに参考になる。「イギリスにおける小自作農とは農村民主主義の現場に生きていた独立心の旺盛な、優れた人格の持ち主である。共有地は貧民の相続財産である。(注：エンクロージャー囲い込みがコモンズを奪った。) 小規模自給農耕とは、自前の農産物、あるだけで満足感、自分の労働を自分で支配できる。賃金経済の圧倒的支配下に長期間置かれた結果、このような特殊な領域は決定的な重要性をもってきている」。

表1 田舎と都会の一般化された対比的な見方

凝縮する観念	田舎(農村社会)	都会(工業社会)
良い感情	平和 無垢 淳朴 自然的生活様式	学問 コミュニケーション 光明 人間の創りあげた中心地
敵意を含む連想	後進性 無知 偏狭	騒音 世俗 野心
伝統的対比	無垢 所有関係を黙殺 嫉妬と憎悪が内在 肉体的・精神的再生の場 孤絶した自然の多産な生命の場 根本的な生の過程の季節的なリズムの場 耕作地vs汚されていない田舎 過去 白痴、未開人	貪欲 腐敗した都会生活 苦渋と無秩序 機械的秩序 金、法律 富、贅沢; 暴徒、大衆; 流動化、孤立 未来
現実の歴史 現代世界	驚くほど多様 中間的な居住地(近郊住宅地、スラム街、工業団地など)	多種多様

ウィリアムス、R. (1973) からまとめた。

こうした社会的意味でも、食料安全保障の意味でも、家族小規模自給農耕は重要な意味をもつ。小規模農耕は伝統的な知恵と技能がないと良好な生産をすることができない。農業機械を使用しなくても、農具レベルで、身体的無理をせずに、楽しく、家族のために必要な少量生産をするのである。安全で、美味しい素材を作れるのだ。これで、潜在自給率はかなり高まるはずだ。市民農園は都市緑地公園などとともに社会的共通資本（コモンズ）として、地域行政府が借り上げるか購入して拡充すべきである。このことに関する小論は別に記した（木俣 2014、2015a、2015b）。

アンケート調査結果の予察

自然文化誌研究会と ECOPLUS が、「農山村の環境と生活文化から学ぶ都市との交流」（2014～2015）の課題に即して実施した環境学習プログラムへの参加者アンケートの結果を、一次的なテキスト解析（SPSS Text Analytics for Surveys ver.4.0.1）してみた。表 2 により、予察的評価を加えてみたい。プログラムに関する評価点はとても良いのだが、ここでは記述された文章から語彙を抽出し、カテゴリ化された代表的な語彙から、参加者の具体的評価内容を考察する。ただし、個別のプログラムへの参加者数は少ないので、ここでは各プログラムの参加者集団間の比較はせずに、すべての共通調査票（n=125）を統合して、参加者の大まかな特性を把握するように試みた。

質問 B1「プログラム評価」に関して、理由として記載されたテキストに 6 回以上抽出された語彙カテゴリを表 2 に示した。この理由には、「できる 16、体験 11、ある 8、思う・プログラム・楽しかった 7、子ども 6」とあり、積極的な語彙が高評価を裏付けている。質問 B2「自然・暮らし理解」では、「自然 18、ある 10、ない 8、言う・出来る・実感 6」とあり、理解が深まったとの評価を示している。

質問 B3「知識・技能を学ぶ」では、「思う 14、知恵 11、ある 10、古く 8、いう・自然・生活 7、まなぶ 6」とあり、高い評価を示している。この質問への回答は重要であるので、さらに具体的に記載された代表的意見を記しておく。それぞれに「古く」からの「生活」「技術」、すなわち伝統的な知恵の意義を深く感じ取っていると見て取れる。図 1 に示したように、「知恵」と関わるカテゴリは「古く」、「生活」、「技術」である点からも的確な理解をしている参加者がいることは確かである。

（調査票 p 33）古くからの伝統が好きと言うということもあるが、それが自分や地元の人にとってなぜ大切かを考えた時に、自分たちもその伝統の過去から未来への継承の流れの一担い手であることを実感することができると思ったため。（p 35）伝統を受け継ぐことは、自分自身のルーツを知ること。自分を知るとは、生きることそのものだと感じた。（p 115）伝統の行事などを体験した方があとで役に立つかもしれないから。

質問 B4「暮らしに活かせるか」では、「思う 19、活かす 9、自然 8、自分 6」とあり、積極的な語彙が多く、暮らしに活かすように期待したい。

質問 B5「農山村への関心」では、記載は少ないものの、「ある 10、おもう 8、しぜ

ん7」から、それなりの効果はあったと思われる。この理由も重要であるので、代表的なものを記しておく。

(調査票 p2) 生活の知恵や経験が地元の人たちからたくさん聞けて、いつも感心しています。もっといろいろ教えてもらいたいと思うと同時に、受け継いでいきたいと強く感じました。(p34) 教科書やニュースで“知っているつもり”にはなっていたが、このプログラムで様々な経験をして農山村をぐっと身近に感じられるようになったと思う。(p39) 人の温かさに満ちていて、このプログラムで得たこの地域の人々とのつながりを絶やしたくないと思った。(p40) 自分が食べるものがどこから来るのかということをもっと考えようと思ったから。(p51) もともと興味・関心はありましたが、今回のプログラムを通してもっとこのような体験をし、自分の視野を広げたいと思いました。

質問 C1「印象に残ったこと」では、「自然 14、思う 10、茶 10、子供 9、あるく・中 7、食べる・感じる・できる・おいしい 6」とあり、自然は当然のことながら、茶づくりへの印象は高く、感覚的な語彙が多い。環境学習プログラムが感覚に連動するとよい効果があることを示しているようだ。

質問 C2「新たな学びや発見」でも、「思う 17、ある 14、ない 12、いう 9、つくる・なる・くる・自然、食べる・茶・子ども・自分・中 6」とあった。質問 C3「生活を変えるヒント」では、「思う 33、自然 15、ある 11、もっと 10、ない 9、考える・つくる・自分 8、いう・環境 6」とあった。さらに、質問 C4「その他」では、「思う 16、ありがとう 15、ござる 11、ある・参加・楽しかった 9、参加したい 8、自然・キャンプ・ない 7、できる・くる・とても・今回・良い 6」とあった。これらの回答は、新たな学びがあり、生活を変えるヒントも見つかり、農山村における環境学習プログラムはとても良かったという評価を明瞭に示している。

表2 アンケート結果のテキスト解析

質問(理由)	カテゴリ(抽出された回数)
B1プログラム評価	できる16、体験11、ある8、思う・プログラム・楽しかった7、子ども6
B2自然・暮らしへの理解	自然18、ある10、ない8、言う・出来る・実感6
B3知恵・技術を学ぶ	思う14、知恵11、ある10、古く8、いう・自然・生活7、まなぶ6
B4暮らしに活かせるか	思う19、活かす9、自然8、自分6
B5農山村への関心	ある10、おもう8、しぜん7、
C1印象に残ったこと	自然14、思う10、茶10、子供9、あるく・中7、食べる・感じる・できる・おいしい6
C2新たな学び・発見	思う17、ある14、ない12、いう9、つくる・なる・くる・自然、食べる・茶・子ども・自分・中6
C3生活を変えるヒント	思う33、自然15、ある11、もっと10、ない9、考える・つくる・自分8、いう・環境6
C4その他	思う16、ありがとう15、ござる11、ある・参加・楽しかった9、参加したい8、自然・キャンプ・ない7、できる・くる・とても・今回・良い6

SPSS Text Analytics for Surveys ver.4.0.1

n=125

調査票のすべてを統合した。

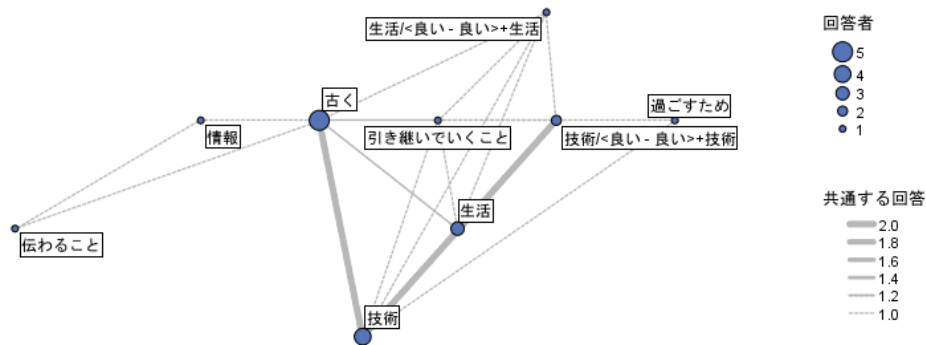


図1 質問 B3「知識・技術を学ぶ」の「智慧」のカテゴリ web

このアンケート調査の対象者は、ほとんどが都会から訪れた環境学習プログラムの参加者であった。田舎の人々が都会の人々に伝統的知恵を伝えると同時に、両者の間での学び合いも必要だ。したがって、田舎の人々、I・U・J・O ターンと類型化される都会からの移住者たちの考え方も明らかにせねば、総合的な比較検討ができない。そこで、これら参加者以外の人々についても同じアンケート用紙で、意見を聞きたいが、実際には設問に対応するように書くには戸惑いがあることだろう。面接聴取して、率直な意見を聞くことにしたい。面接者数には限りがあり、集団が小さいので、プログラム参加者との数量的な比較は難しいが、質的な比較は可能である。

生活文化の再創造による継承

『遠野物語』を出版したころ（1910）の柳田（1968）の中核概念は「山人」で、山人とはアイヌをはじめとする先住民族であり、日本人の混合民族説の立場に立っていた。ところが、山村に強い関心をもっていた柳田は稲作を携えた単一民族説の立場へと変化した。日本人が稲作・単一民族であるとの説には雑穀研究の立場からは承知できないので、私はその理由を長らく知りたと思っていた。稲作の呪縛は、明治維新、さらに言うなら太平洋戦争の頃に、強められたのだと考えるようになった。この呪縛が、日本の食糧自給を低下させている生物文化多様性に関わる主原因と見ているからである。小熊（1995）は、私のこの疑問や課題意識をかなり明快に解いて見せてくれた。柳田は、「山民はコメが大好きで、コメほしさに平地民と交流して同化されていった」と言っているが、山村には麦・雑穀があり、「米の力」で服従を強いられたとは、私には納得できない。小熊によれば、柳田の思想は次のように概観される。気になった記述を掲げておく。「日本は異民族のかわりに日本民族の仲間を奴隷化したのだ。生産を担いつつ奪われる常民は、輸入文化に享楽する都市の利口者たちに虐使される、現代の奴隷である。…北へ北へと此国を開いてきた民族が、今以て稲を作らずには片時も安心して居られぬこと、稲が故郷の亜熱帯の植物であって、神の粢も祭の日の米の飯も、是が第一の資料である。

…山国では兵役に出て始めて米と云ふものを口にした人が幾人もあります。稲作が健在なかぎり、列島共通の民俗を掲げられる。そのためには、稲を伴わない日本人があってはならず、稲作が輸入文化であってはならなかった。日本民族は稲をたずさえて南島から渡来し土着した民族でなければならず、列島に先住民族がいてはならなかった。…稲作単一民俗の島国という図式は、その後の日本の自画像形成に決定的な影響をのこす。そして排外と平和の二重性は、戦後の単一民族神話の基本的性格となってゆくのである」。

私は植物学者として、柳田のように稲を特別視する気はない。常民はそれぞれの環境の中で、得られる食材を大切に調理してきたのであり、麦、雑穀、芋、その他の栽培植物も、同じく重要な生き物であるとの認識で、これらの起源と伝播を調査研究してきた。征服者の食糧が優位にあるのは認めても、常民は居住する歴史も加えた自然環境の中で、自らの伝統的栽培植物、在来品種を大切にしていくなすべきだ。山村は稲を作れなかったのではなく、本来作らなかったのだ。稲の石高制になってから、さらには第2次大戦中の配給制度によって、環境的に困難であっても、山間地で無理に稲作を始めたのだ。後者の場合は戦後しばらくして、植林地などされてしまった。意図されてか、歴史的順序が間違っていて認識されているのである。

中部山岳地周辺やその以北は堅果類など自然の食材が多く、縄文時代の狩猟採集、さらには焼畑農耕が豊かに行われてきた。芳賀ら（1991）は、飛騨が大和王権の米文化圏に抵抗し続けた雑穀文化圏と認識しながら、それでも、調査研究では「米への願望がすべてとあってよいくらいであった。それほど山国飛騨は米を求めて他国と交流している」と記述しているように、柳田の稲作文化論に強く影響されて、地域の歴史環境への見方に公正さを欠いていると思われる。他方で、「…飛騨牛供給地であり、温泉群と登山、スキーなどのレジャーランドを形成している。…それは日本人が自然を愛し自然破壊を回避し、精霊のやどる山国の自然信仰と自然を守りつづけ、過疎を避け、国土の各地を人すむ里として再生復活創成をくりかえしていただくための一事例として、…。豊かな調和ある発展をめざすのは、いつの世でもその土地にすむ人々の志である。できる限り土地に生きたいのが故郷をもつ人々の志でもある」、とも述べてもいる。地域社会に強い情愛を抱くのならば、伝統的な暮らしを活かす風土産業を盛り立てたい。

山間地で地場産業を経営していくためには、自然に添った小規模多様な産業を興すか、都市近郊地では自給的な生業を継承しながら、都市で働く方法もとれる。私は長年調査研究をしていく中で、都市住民が山村民から伝統的知恵、生活技能を学ぶ活動を「環境学習」観光産業として振興することを提唱してきた。トランジションした新たな文明のありようを望見するに、次世代を受験勉強に追い立てるより、人生を豊かに自分の手で組み立てられる知恵や技能習得の方が大切だ。

山村の人口維持機能の研究で、三井田（1979）は、天然資源を活用しているいくつかの村はそれほど過疎化していないことを明らかにしている。しかし、この事例では、

山菜採集、ダム建設、スキー場経営であり、また、交通の発達と観光客の入込であり、率直に言えば、皮相な可能性を示しているに過ぎない。その後の、一層大きな高齢化の課題には対応していない。

『風土産業』は三澤（1936）が、第二次世界大戦の前夜、2.26事件の起こった年に、長野県の青年講習会で講演した要旨を整理したもので、彼の門人河角が三澤の逝去（1937）後に、敗戦からの日本の再起を期し、師の著作を若者のために復刻（1947）したものである。地震学者であった河角は序で次のように書いている（注：現代漢字に書き換えた）。「我が国は今未曾有の艱難に際会している。…由来我が国ほど天災の多かった国も稀であるが、我等の祖先は立派にこれに堪え通した。我々もこの禍を転じて福となす力は祖先から受け継いでいる筈である。我々は明治初年の我等の父母よりも遙かに良い境遇にある。然も過去の誤れる主義政策の桎梏は今や取去られたのである。勇気を取戻し、道義に立返ろう。…本書は正に一昔前、日華事変も始まらぬ世界不況時代に人口過剰に悩み、疲弊の極みにあった地方振興のために叫ばれた南米移住も満州移民にも反対した一先覚者の終生の体験と思索を経緯とする研究論策である」。三澤は本文の中で次のように述べている。「由来、時・処・人は三位一体である。…風土はそこの大地と大気との接触から招来された純自然物である。従って無価格ではあるが、しかし極めて価値の高いものである。あらゆる産業、あらゆる生活は不知不識、この風土と深い交渉を持っている。否、有識的に持つべきである。…その最も根本的着眼は、新作物・新品種の発見或いは育成が即ちそれである。…その地方、その郷土の開拓・振興は、その地方、その郷土の人以外に望んでもそれは無理である。「自分のことは自分で」。従って、真の適地適作主義の実現、所謂風土産業の招来には、より以上各地方人士の覚醒が肝要である。…特に各地青年諸君の覚醒と奮起とを深く期待するものである。…要するに今後の産業は、もっと頭を働かせた、もっとそこの風土に即した、更に言い換えればより大自然に即した、即ちその大自然を基調としたものでなければ、真に堅実な産業として安心しているわけにはいかない。…我等の郷土も亦、そのかわりを全世界に持つ。されば郷土に対する真の理解は、その先行きとして全世界に対する深い教養を要求する」。

三澤の論説は戦争前夜のあの時代に、非常に強い自己抑制を利かせながらも、遠い世界と未来を凝視していると感服した。敗戦後にも、この志を受けた河角の曇りなき、三澤の思索への真正な理解に高い敬意を表したい。学問の系譜、その向上とさらなる蓄積はこのことのほかにない。この国の不可解は、地域の優れた先人から学ぼうとしないことだ。さて、田舎と都市との間の障壁を取り除き、人々の幸せな暮らしを回復していくために、トランジションの試行を進めたい。この実行にはまさに伝統的な知識や技術を体験的に学ばねばならない、これらを伝える人々はすでに高齢を迎えている。今のタイミングにおいて、生活文化の再創造と継承の機会はないと思い決める。エコミュージアム／日本村塾ではひたすら先人から体験的に学び、ともに思索していきたい。誰がどう

言おうと、黙殺しようとして、「自分のことは自分で」きめて、行動するのである。

引用文献

芳賀登編、山の民の民俗と文化—飛騨を中心にみた山国の変貌、雄山閣出版、東京、pp.527.

木俣美樹男 2015a、生きるという任意・自律的な営為を動かす心情の省察、民族植物学ノオト第8号、印刷中。

木俣美樹男 2015b、ドイツ散訪、<http://www.milletimplic.net/essey/germvist.pdf>

三井田圭右 1979、山村の人口維持機能—その地理学的研究、大明堂、東京、pp.211.

三澤勝衛 1952、河角廣編 1986、風土産業、古今書院、東京、pp. 257.

小熊英二 1995、単一民族神話の起源—<日本人>の自画像の系譜、新曜社、東京、pp.450.

柳田国男 1968、定本柳田国男集第四卷、筑摩書房、東京、pp.508.

ウィリアムス、R. 1973、田舎と都会、山本和平・増田秀男・小川雅魚訳 1985、晶文社、東京、pp.425.